

「舜子変」について —舜説話の比較を通して—

大 西 由美子

はじめに

20世紀初めに敦煌で発見された敦煌文書の一つである「舜子変」は、古代の舜帝について書かれた語り物であり、『史記』や『孟子』等の記載とは異なる内容を含み、中国古来の思想や儒仏の思想が混在する独特の特徴を有している。他の舜説話に比べ「継子いじめ」の要素が強く、帝としての偉大な舜を描くというよりも、受難に遭っても尚孝行を貫き、最後には堯から帝位を譲られるという一人の人間の「孝行譚」となっている。本稿では、先行研究を踏まえながら、敦煌写本「舜子変」と他の文献における舜説話との比較を通して「舜子変」の特徴について考察する。

1. 「舜子変」の鈔本について

以下に「舜子変」の鈔本を示す。鈔本番号のSはスタイン、Pはペリオ、羽は『敦煌秘笈』（武田科学振興財団 2009～2013）収載の羽田亨、Dxはロシア蔵の鈔本を示し、番号の後のvは紙背文書を表している。

金岡照光氏は次の表のS.4654とP.2721vについて、筆跡は異なるが同じ底本から成るものであろうと推測しておられる¹⁾。二つの鈔本の間には内容から見て数行の欠落があるが、本稿でもこの二つの鈔本を合わせて「舜子変」として扱うものとする。

鈔本番号	題名	形状	行数	首部	尾部
S.4654	首題《舜子變一卷》	首全 後欠	題名含め 存23行	「舜子變一卷 姚王里化之時 …」	「…舜子即忙下樹」 (書き止まり)
P.2721v	尾題《舜子至孝變文一卷》	前欠 尾全	尾題まで 存113行	(破損)「房中 臥地不起不經 三兩…」	「…感得穿井東家連 舜子至孝變文一卷」
			尾題の後 奥書9行	「檢得百歳詩 云…」	「天福十五年歲當己酉朱 明蕤賓之月糞生拾肆葉、 寫畢記」

その他の舜に関する敦煌文献は以下の通りである。

P.2621	事森	首尾完	題名なし 24行	「孝友舜子姓 姚字仲華…」	「…舜乃禪帝位而歸於禹。 出太史公本紀」 詩なし。
P.3536v	大舜向生王褒 三人傳	首尾完 (文字不明瞭)	題名なし 10行	「昔舜子者…」	「…感得穿井東家連」 二首の詩で終わる。 二妃・讓位の話なし。
S.389v	孝子傳(擬)	首尾完	題名なし 11行	「舜子者冀邑 人也…」	「…感得穿井東家連」 二首の詩で終わる。倉、 二妃・讓位の話なし。
羽 39V、三	舜子變 (孝子譚) (舜子變)	首尾完	題名なし 孝子傳7行	「昔舜子者冀 邑人也…」	「…以舌舐眼、得再明、 其詩曰。」倉の話なし。 変文の後に二首の詩。
		首尾不完全	題名なし 舜子變21行 +詩4行	「後母既被瞽 叟容許計…」	「…説詞已了、舜即尋母」 倉の話なし、母の墓を尋 ねる所まで。
ロシア蔵 D x 00440V	舜子変文	首尾不完全 (断片)	題名なし 10行	「事母…」	「…打舜…」

以上の鈔本のうち、P.2621は「舜子變」の前に孝子の「孟宗」と後に「姜詩」、P.3536vは後に「向生」、S.389vは前に「郭巨」と後に「文讓」、羽39V、三は後に「郭巨」が置かれていることから、舜説話を孝子譚の一つとして載せていることが分かる。また羽39V、三は初めに「舜子變」の要約と思われる部分(表では孝子譚と記載)があり、その後に変文(表では舜子變と記載)が続き、後に「郭巨」の孝子譚が続く。それぞれの題名については、『敦煌遺書総目索引

新編』(中華書局 2000年)及び『敦煌秘笈』によった。ロシア蔵Ⅹ00440Vは不明瞭な断片であり、一部P.2721vと共通する語を確認するのみである。

尚、本稿で各鈔本の原文を引用する際、誤字や仮借字は()で正す。

2. 「舜子変」と他の舜説話との比較

(1) 「舜子変」の説話内容

「舜子変」の内容を順に7つのプロットに分け、見出しをつけて以下に要約する。下線部は他の文献と比較する上でポイントとなる部分である。

① 桃の樹の話

舜(重華)の実母の樂登夫人が亡くなると、父の瞽叟は後妻を娶った後、遼陽に商売に出かけ3年戻らない。手紙を携えた老人が来訪し父の帰宅を伝える。父のために後妻は桃を採るように舜を裏庭の桃の樹に登らせ、その間に自分の足を簞で刺し大声で喚んだため、舜は急いで樹を下りる。(ここまでS.4654、後欠) / (前欠、ここからP.2721v) 帰宅した父が後妻の讒言を信じ、舜を折檻する。孝順な舜に感応した帝釈が老人に化して現れ舜を助ける。

② 倉の修繕

後妻が謀り瞽叟が舜を倉に上らせて修繕させる。西南の角から後妻、瞽叟、(異母)弟象の順番で倉に火をつける。舜は二つの笠を広げて飛び降りる。地神が舜を救う。

③ 井戸浚い

後妻が謀り瞽叟が舜に井戸浚いをさせる。帝釈が銀錢五百文を井戸の中に入れ、引き上げた父母は泥の中の銀錢を見て大喜びする。しかし、錢が無くなると舜の異母妹が止めるのもきかず父は井戸を石で埋める。帝釈が一匹の黄龍となって舜を東の家の井戸へ引っ張り、舜は隣家の老婆に助けられる。

④ 歴山での耕作

老婆の勧めで舜が墓参に行くと亡母が現れ、歴山に行って耕作をするように言う。歴山に行くと、天が舜の至孝を知り、猪の群れが口で畑を耕し、たくさんの鳥が種を銜えて撒き、天が雨を降らせる。この年世の中は不作だったが、

舜の田は豊作となる。ある時舜は商人から、父は盲目になり、継母は愚者に、弟は気がふれて貧乏極まりない実家の様子を聞く。

⑤市場での再会

舜が歴山に来て十年、米を売りに故郷の市場に行くと薪売りの継母に遭う。舜は継母に米を売り、もらった米代も米袋の中に入れる。不思議に思った瞽叟が継母とともに市場に行き舜と再会する。舜は父の涙を払い、舌で父の眼をなめると、眼が開く。継母も聡明になり、弟も話ができるようになる。

⑥二妃と讓位

家に戻り後妻を殺そうとした瞽叟を舜は止める。親孝行の舜の話聞いた堯帝は娥皇と女英という二人の娘を嫁がせ、帝位を讓る。女英は商均を生んだが不肖の子だったため帝位を禹王に与えた。

⑦二つの詩

瞽叟填井自目盲、舜子從來歷山耕。 將米冀都逢父母、以舌舐眼再還明。
孝順父母感於天、舜子濤井得銀錢。 父母拋石壓舜子、感得穿井東家連。
説話内容をまとめた上記二つの詩の後に奥書きがつく。

(2) 「舜子変」と他の舜子説話との内容の比較

舜説話は『尚書』、『楚辞』を初め種々の文献に記載が見られるが²⁾、その中で『孟子』万章句上、『史記』五帝本紀、『古列女傳』卷一母儀傳有虞二妃、『論衡』卷二吉驗篇、『宋書』卷二十七符瑞上、『千字文』推位遜國有虞陶唐 李暹注、『法苑珠林』忠孝篇第四十九感應録と、1981年出土の寧夏固原北魏墓漆棺画を取り上げ以下の表で比較する。「舜子変」と同じ内容の記載があるものを○、一部同様の記載があるものを△、無いものを×とし、また特徴的な内容を要約し記した。

尚、表の①欄は、各説話に於いて「舜子変」の最初のプロットよりも先に話が存在する場合にその内容をおおまかに記したものである。また④欄の△①欄既出※とは、③のプロットにつながる話として歴山の話は無いが、すでに①欄で歴山について記載があることを示し、⑥欄の△①欄既出※も同様に、①欄ですでに二人の妃が舜に嫁していることを示している。更に、⑥欄では各説話の

「舜子変」について 一舜説話の比較を通して

舜子変	『孟子』	『史記』	『古列女傳』	『論衡』	『宋書』	『法苑珠林』 (劉向)	『千字文』 李暹注	漆棺画
①	○ (歴山での号泣) 堯は九人の皇子と二人の皇女、二人の皇女、牛羊、倉の米、財貨を与える。天下の識者も舜の徳を慕って集まったので帝位を譲ろうとした。	○四嶽が後継者として舜を薦めたので、二人の娘と九人の息子を送り観察させた。歴山、雷沢、河浜での舜の徳化の話。堯が緇衣、琴を与え、倉を築き牛羊を与えた。	○堯は四嶽が後継者として、薦めた舜に二人の娘を娶せ観察させた。	○舜はまだ堯に逢わず、田舎でやもめ暮らしをして	○母の握登が大虹を見て舜を姚墟で生む。瞳が二つあったため重華と名付けた。	×	○舜が孝行であることを聞き、堯は二人の娘を娶せた。長女は娥皇、次女は女英。	×
①桃	×	×	×	×	×	×	×	×
②倉	○	○	○	○	○鳥の服	×	○蓆	○
③井戸	○脱出後、舜が弹琴。	○脱出後、象が弹琴。	○ 飲酒の話	○	○龍の服	○	○友人が錢500を与える。	○
④歴山	△①欄既出※	△①欄既出※	△田に行き号泣する。	×	△出耕於歴山夢眉長與髮…	○	○	×
⑤市場	×	×	×	×	×	○目を舐める	○継母に餅と肉を与える。衣襟で目を拭く。	○
⑥二妃と讓位	△①欄既出※ 舜帝は象を有庫の諸侯とした。	△①欄既出※ 父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝になり、家は平和に世は治まる。…父に子道を尽くし、象を諸侯とした。	△①欄既出※ 舜帝は、象を有庫の諸侯にし、また瞽叟に仕えた。舜が亡くなると、二妃は江湖の間に身を投げた。 二妃が瞽叟を融和させた。	×	×	×	○大聖人の至孝は神明である。 ○堯帝が舜の聡明さを聞き位を禪讓した。	×
⑦詩	×	×	×	×	×	×	×	×

最後がどのようにまとめられているかを記した。

上記の表の○×に着目すると、舜が堯の二人の娘を娶る時期が①プロットにあるか、或いは⑥プロットにあるか、また歴山での耕作や市場の場面が、倉や

井戸での舜の受難の後に存在するかどうかにより、大きく二系統に分けられることが分かる。前頁の表の『宋書』と『法苑珠林』忠孝篇の間がその境目であると考えられる。

(3) プロットごとの比較

次に、「舜子変」及び各舜説話をプロットごとに比較する。

①プロット

上述の通り、「舜子変」の最初の部分には無いが、他の文献で舜説話の初めに置かれている話を①プロットとした。「舜子変」では、舜の親孝行の話聞いた堯帝が二人の娘を嫁し帝位を譲る話を⑥プロットに置いているのに対し、『孟子』や『史記』、『古列女傳』では、堯の後継者として四嶽が推薦した舜を試すために、堯が舜に二人の娘を嫁がせる話を舜の受難の前に記載している。また『千字文』李暹注でも受難の前に堯が二人の娘を舜に嫁がせている。この他『尚書』、『山海経』、『楚辞』、『淮南子』、『初學記』にも同様の記載があるが、これらの文献にはこの後に続く倉や井戸の受難の話は見られない³⁾。『論衡』と『宋書』には、前頁の表に示したように『史記』や『孟子』の記載とも異なる話が初めに置かれている。

①プロット 桃の樹の話

「舜子変」では舜の実母の名を樂登、『史記』索隱や『宋書』では「握登」としており、どの説話も、父の瞽叟、実母、後母（後妻）と異母弟の象が登場する。また「舜子変」では妹に関し、実母の言葉として「立（妾）有姑（孤）男姑（孤）女」、継母の言葉として「前家男女」⁴⁾があり、「井戸浚い」のプロットでは「後母一女把着阿耶、煞却前家歌（哥）子、交（教）与甚處出頭。」と、異母妹が舜を助けようとする。『古列女傳』卷一母儀傳有虞二妃では、「舜之女弟繫、憐之、與二嫂諧。」と舜の妹が登場し、後述する広西壮族師公戲「舜児」でも妹が現れる。舜の妹に関しては『漢書古今人表』に「馱手、舜妹。顔師古曰馱音口果反。流俗書本作繫字者誤」とあり、『説文』でも「馱、舜女弟、名馱首。」と記載がある。また『越絶書』では、「舜父頑母囂兄狂弟象」と兄についての記述もある。

この①プロットの「桃の樹の話」は「舜子変」以外の文献には見られない。しかし、金文京氏はこの話が残るものとして、広西壮族師公戲「舜児」⁵⁾を挙げておられる。田仲一成氏撮影の『東洋文庫』所蔵の映像によれば、舜を桃の樹に登らせた継母が、樹の下に竹釘をばらまき、誤って自分がそれを踏み大騒ぎをする展開となっており、妹も登場する。また陳泳超氏によると、その他に江西、福建で「舜」説話を題材とする9種の口伝文芸を確認しており、その中に同様の話が見られるとのことである⁶⁾。この説話が中央から広西に伝わった経緯について、金氏は軍隊の派遣との関連を考察されている。なぜこの地域にのみ「桃の樹の話」が残ったかについて、『史記』には「踐帝位三十九年南巡狩崩於蒼梧之野、葬於江南九疑是爲零陵」と舜の崩御に関する記載があり、江西、福建は舜が亡くなった九疑に近いため、他では失われた桃の樹の話が、現在まで伝わって来ているのではないかと本稿では考える。

②プロット 倉の修繕

このプロットについて、舜を殺そうとした者と舜が逃れた方法に着目して各文献に記載されている原文を比較のため以下に示す。

「舜子変」	後妻設得計成。…弟(第)一火把是阿嬢…。舜子恐大命不存、 <u>權把二個笠子爲馮、騰空飛下倉倉。感得地神擁起。遂燒毫毛不損、歸來書堂院裏。</u>
『孟子』	萬章曰、 <u>父母使舜完廩捐階、瞽叟焚廩。</u>
『史記』	<u>瞽叟尚復欲殺之、使舜上塗廩。瞽叟從下縱火焚廩。舜乃以兩笠自扞而下去得不死。</u>
『古列女傳』	<u>瞽叟與象謀殺舜使塗廩。舜歸告二女曰、父母使我塗廩、我其往。二女曰往哉。舜既治廩乃捐階、瞽叟焚廩、舜往飛出。</u>
『論衡』	<u>瞽叟與象謀殺欲殺之、使之完廩、火燔其下、令之浚井、土掩其上、舜得下廩、不被火焚…。</u>
『宋書』	<u>舜父母憎舜、使其塗廩、自下焚之。舜服鳥工衣服飛去。</u>
『千字文』 李暹注	<u>瞽叟信後母讒言共象弟等謀欲殺舜、乃令蓋屋舜知其意遂持大簾上屋。父放火烧屋、舜以簾裹身、跳下。</u>
P.2621	舜有孝行、後母嫉之、語瞽叟曰「爲我煞舜。」叟用妻言、遣舜泥知母意、手持双笠上合。 <u>叟從後放火烧之、舜乃与兩脇挾笠投身飛下、不損毫毛。</u>

『史記』では瞽叟が舜を殺そうとする首謀者であるのに対し、他の説話では「父母」或いは瞽叟と異母弟の象と様々であるが、「舜子変」では後妻が首謀者

となっており、「継子いじめ」の説話としての性格が強くなっている。また「舜子変」では、舜が二つの「笠」を使って倉から飛び降りるが、その他の説話では二重傍線で示すように、「鳥工衣服」「蓆」等違いがある。更に賈慶超氏によると⁷⁾、後漢武氏祠画像石左石室第7に描かれた画はこの場面を描いたもので、燕尾服のような服を身につけ階段を上っていく舜の姿は『宋書』の「鳥工衣服」に通じるものと考えられる。また寧夏固原北魏墓漆棺画の第一の場面にも燃え盛る倉の二階から裸で飛び出す舜の姿が描かれている⁸⁾。

「舜子変」のこのプロットでは「地神」が舜を救うが、これは他の舜説話では見ることができない。「地神」は中国古代の「大地の神」を指すものと考えられ、日本の『太平記』卷三十二直冬吉野殿と合體の事兩天竺震旦物語の事に採られている舜説話の中の井戸浚いの場面で舜を救う「堅牢地神」（仏教の天部の神）はこの影響を受けたものであろうか。前述の広西壮族師公戲「舜児」では、「天」によって舜は救われる。

③プロット 井戸浚い

次に井戸浚いの場面について記載のある各文献を比較する。

井戸浚いの話は舜説話のほぼ全てに記載があり、川口久雄氏⁹⁾によると北魏及び北齊の画像石にもこの場面が描かれているとのことである。したがって、このプロットは舜説話の核心をなすものと考えられる。②のプロットと同様に、ここでも『史記』では瞽叟が舜を殺そうとする首謀者であり、その他の説話も父母や異母弟の象と父母が舜を殺そうと凶るが、「舜子変」では明らかに後妻が首謀者である。

①のプロットで述べたように「舜子変」では井戸を石で埋めようとする父を舜の異母妹が止めようとし、『古列女傳』でも「飲酒の話」の後に「舜女弟繫」が登場する。この「舜に酒を飲ませて殺そうとする話」（次の表の□部）は他の舜説話には見られず、『古列女傳』では「倉」「井戸」「酒」で三つの受難とし、舜は常に二妃に相談して難を逃れ、二妃の賢明さに焦点が当てられている。

『孟子』と『史記』では、表の点線部に示すように、舜が井戸から脱出した後の記述が異なっている。『孟子』では「象往入舜宮、舜在牀琴」と、象が二

妃と琴を自分の物にしようと舜の館に行くと、井戸に埋めたはずの舜が琴を弾いており、『史記』では逆に「象乃止舜宮居鼓其琴。舜往見之、象愕…」と、象が舜の館で琴を弾いていると、死んだはずの舜が帰宅し象が驚くという展開になっている。この内容は中国ではこの二書にしか見られず（日本の『唐鏡』は『史記』と同様、また『太平記』は『孟子』と同様の記載を有する）、しかも構成が同じことから、本来は同じ話であったものが変化したと考えられる。

また、井戸からの脱出について、『史記』、『古列女傳』、『論衡』では舜が自力で脱出し、『千字文』李暹注では「隣人と親友」が助けている。『宋書』で「服龍工衣」とあるのは、「舜子變」の「黄龍」に通じるものであろうか。「舜子變」及びP.3536v、羽39V、三は、『帝釈』が舜を助け、P.2621、S.389vは「天」、

「舜子變」	後妻設得計成、…上界帝釈蜜降銀錢伍百文入於井中。…瞽叟便即與大石填塞。…帝釈變作一黃龍、引舜通穴往東家井出。
『孟子』	父母…使浚井出從而捨之。象曰謨蓋都君咸我績、牛羊父母、倉廩父母、干戈朕、琴朕、二嫂使治朕棲、象往入舜宮、舜在牀琴…。
『史記』	後瞽叟又使舜穿井、舜穿井為匿空旁出。舜既入深。瞽叟與象共下土實井、舜從匿空出去。…象曰本謀者象、象與其父母分。於是曰、舜妻堯二女與琴、象取之。牛羊倉廩予父母。象乃止舜宮居鼓其琴。舜往見之、象愕…。
『古列女傳』	象復與父母謀使舜浚井、舜乃告二女、二女曰兪往哉。舜往浚井格其出入從掩。舜潛出時既不能殺舜。瞽叟又速舜飲酒醉將殺之、舜告二女。二女乃與舜藥浴汪。遂往舜終日飲酒不醉。
『論衡』	瞽叟與象謀欲殺之、使之完廩、火燔其下、令之浚井、土掩其上、舜得下廩、不被火焚、穿井旁出、不觸土害。
『宋書』	舜父母…又使浚井自上填之以石、舜服龍工衣自傍而出。
『千字文』 李暹注	復使淘井欲埋之、時隣家知其意、語舜曰、父母當令君淘井、必有惡心、何不避之…親友憫之、與舜錢五百、…舜腰著錢五百入井中…舜乃於東家井傍穿穴、孔相通…父母及弟見鐘中無錢、遂將石填之。其父兩目即盲、母便耳聾、弟遂口啞、又遭天火燒其屋、舜已從東家井中出。
『法苑珠林』	舜父有目失始時微微至後妻之言舜有井穴乏。
S.389v	父取後妻、妻譖其夫、頻欲殺舜、令舜淘井、与石壓之、孝感於天、徹東家井出
P.2621	(叟用妻言)…後右(又)使舜濤井。舜既父与灌(鐘)承泥、又感天降銀錢致於井中。…於是舜傍捨一穴、内得次東家井連、從井中出
P.3536v	頻欲煞舜、令舜淘井、以石壓之。帝釈照見、東家出井。
羽39V、三	後妻…設得計成、…上界帝釈蜜降銀錢伍百文入於井中。…瞽叟…遂即真怒便与大石填塞。…帝釈變作一老黃龍、引舜通穴往東家井出。

広西壯族師公戲「舜児」は「天帝」が助け、人間以外の他力によって救われるという点で『史記』等と大きな差異を見せている。

④プロット 歴山での耕作

「舜子変」では、東隣の老婆の勧めで母の墓参に行き、現れた亡母から「取西南角歴山躬耕、必當貴。」と言われ、「舜取母語、相別行至山中、見百餘頃（頃）空田、心中哽噎。種子犁牛、無處取之。天知至孝、自有郡（群）猪與（以）耨耕地開墾、百鳥銜子拋田、天雨澆漑。」と歴山で猪の群れやたくさんの鳥に助けられ耕作する話が続く。これと同様に舜の受難の後に歴山の話が続くものは、『宋書』「耕於歴山、夢眉長與髮等及即位帝…」と、『千字文』李暹注「投諸歴山耕田、歲収二百石粟。」及び鈔本 S.389v、P.3536v と P.2621、羽39V、三である。『孟子』、『史記』等では、舜は歴山に行かずに話は終わる。『古列女傳』も「舜往于田、號泣曰呼旻天呼父母。」とだけ記され、歴山という記載は無く、その後の市場の話もない。

歴山に関しては、『尚書』、『韓非子』、『越絶書』、『搜神記』、『初學記』等にも記載があり¹⁰⁾、また山東武梁祠闕石室画像〔後漢建和元年（147）の刻銘〕は『越絶書』の「身自外養」という記載に合致した榜題「帝舜名重華 耕於歴山外養三年」を有している。これらは『孟子』の「舜往于田、號泣于旻天〔于父母〕。」や『古列女傳』に見られるように、孝を尽くしても父母に分かってもらえず号泣するという内容や、『史記』の「舜耕歴山、歴山之人皆讓畔、漁雷澤、雷澤上人皆讓居、陶河濱、河濱器皆不苦窳。」のように「舜が歴山で耕作すると人々は皆畔を讓った。」と舜の徳を示すものが多い。そして、『孟子』も『史記』も歴山の話は舜の受難の前に置かれており、「舜子変」のように歴山の場面が受難の話の後に続き、市場で親子が再会するという大団円に向かって行く説話とは一線を画している。

⑤プロット 市場での再会

市場での親子の再会のプロットを有する話は『千字文』李暹注や、『法苑珠林』及び『舜子変』の鈔本の類に限られ、その中でも『千字文』李暹注では継母から薪を倍の値段で買い取った上に、米の代金の他に餅や肉まで与えている。ま

た、父の眼が開く場面では『舜子変』、『法苑珠林』とS.389vが「與（以）舌舐其父眼、其眼得再明。」、またP.3536v、羽39V、三が「…以舌舐眼、得再開。」と、皆舜が舌で父の眼を舐めているのに対し、『千字文』李暹注では衣襟で目を拭き、P.2621では「以手拭其父淚、兩目重開、母亦聽惠、弟復能言。」と手で涙を拭っており、記述がやや異なっている。日本で見られる舜説話は皆「袖」「衣」「手」で拭うとなっており、「舌で舐める」という表現は見当たらない。

⑥プロット 二妃と讓位

「舜子変」の「天下傳名、堯帝聞之、妻以二女、大者娥皇、小者女英。堯遂卸位與舜帝。英生商均、不肖。舜由此卸位與夏禹王。」とほぼ同じ内容を有するのはP.2621で、「市人見者、無不悲嘆、稱舜至孝。堯帝聞知、娉与二女、大者娥皇、小者女英、堯王於是禪位與舜子。…舜乃禪帝位而歸於禹。出太史公本紀」と記載がある。『千字文』李暹注は、受難の前にすでに堯が舜に二妃を嫁す話はあるが、最後は「孝順聲聞四海、帝聞其聰明禪位與之。是爲帝舜…在位八十歳。生子商均不肖又禪位與司空伯禹。是爲夏後氏、三王之祖也。」と、舜の孝行の話が四海に広まり堯が帝位を禪譲するという「舜子変」と同様の内容になっている。一方『孟子』、『史記』、『古列女傳』は、①プロットで述べた通り、舜は受難の前にすでに堯の二人の娘を娶っており、後に讓位についての記載はあるものの¹¹⁾、⑤プロットまでの話と直結するものではない。

⑦プロット 二つの詩

「舜子変」の最後の二つの詩は説話内容をまとめたもので、P.3536v、S.389v、羽39V、三の各鈔本にも記載が見られる。説話を締めくくるものとして詩が置かれており、散文と韻文で構成される語り物の特徴を有していると思われる。

また「舜子変」の奥書きの中の「百歳詩云、舜年廿學問。卅堯舉之。五十大行天下事。六十一代堯踐帝位。在位卅九年、南巡狩、崩於蒼梧之野、年百歳。葬於〔江〕南九疑、是為零陵。舜子姓姚、字重華。……天福十五年、歲當己酉朱明蕤賓之月、莫生拾肆葉、寫畢記。」（金岡氏は天福15年を950年と推測されている¹²⁾）という「百歳詩」の記述は、『史記』の内容と合致している。「百歳詩」は逸書であるが、語りとしての「舜子変」の最後に、舜についての

正史の記述を記していることはまことに興味深い。更に奥書きの後の7行の文章を、玄幸子氏は付記と見做されている¹³⁾。

以上「舜子変」を7つのプロットに分け他の資料と内容の比較をしてきたが、黒田彰氏によると¹⁴⁾北魏司馬金竜墓出土木板漆画屏風にも、焼廩、填井、二妃等の画が描かれているとのことである。また②プロットで言及した寧夏固原北魏墓漆棺画には「舜後母将火烧屋慾葬時」から「父明即開時」まで標題のついた画が描かれ、これには歴山の画は無いが、市場の場面を有し、舜説話の後に別の孝行譚が続けて描かれているため、鈔本の「孝子傳」類と同様の説話を反映したものであると考えられる。

3. 舜説話の系統について

(1) 舜説話の系統の分類

舜説話について、上述の2の(2)で示した各文献を①～⑦のプロットごとに比較した表と、以上の考察から、舜が堯の二人の娘を娶る時期及び歴山での耕作や市場のプロットの有無により、大きく二系統に分けられると考えられる。増田欣氏が日本の舜子説話を分類され、その構成を「史記型」、「孝子伝型」と呼んだ¹⁵⁾が、それにほぼ相当するものである。

① [A]『尚書』『孟子』『史記』『古列女傳』『論衡』等の経史系統（史記型）

堯が後継者として舜を試すために二人の娘を嫁がせる→倉、井戸での受難→舜の徳によって父親らが改心する（『古列女傳』は二妃が瞽叟を融和させる。）という筋書きになっており、市場の話は無い。これらは、帝舜の徳（『古列女傳』では二妃の聡明さ）を称えることが主眼とされ、この系統は『資治通鑑』、『十八史略』、日本の『唐鏡』、『太平記』等に引き継がれて行く。[A]の経史系のうち『宋書』は、「鳥の服」「龍の服」で受難から逃れ、歴山での耕作の後、夢の話や西王母の話が続く独特の展開となっている。

② [B]「舜子変」、『千字文』李暹注、『法苑珠林』感應録、S.389v、S.2621、P.3536v、羽39V、三、寧夏固原北魏墓漆棺画等の孝子譚系統（舜子変型）

倉、井戸の受難→舜が歴山で耕作→市場で親子が再会し父の眼が開く→親孝

行の話聞いた堯が二人の娘を舜に嫁がせ帝位を譲るという「孝子譚」となっている。『千字文』李暹注では受難の前に舜が二妃を娶るが、市場の話の有るので㊦の孝子譚系に分類した。この系統は、他の孝行譚と併せて記載されることが多く、郭居敬（元）編纂の『全相二十四孝詩選』や、朝鮮の『孝行録』（益齊李齊賢賛）、また日本の『陽明本孝子傳』、『船橋本孝子傳』、『注好選』、『三国伝記』、『慈元抄』、『御伽草子』等に繋がって行く。

③ その他二系統に属さない「不孝」の舜についての記載があるもの。

『韓非子』卷二十 忠孝篇 第五十一「瞽瞍爲舜父而舜放之。象爲舜弟而舜殺之。放父殺弟不可謂仁」

『淮南鴻烈集解』卷十三 汜論訓（後漢 高誘注）「舜有卑父之謗 謂瞽瞍降在庶人也」

『越絶書』卷第三 越絶呉内傳第四（後漢 袁康）「堯有不慈之名 舜有不孝之行…。」

上記の書は、㊦系㊦系に見られる至孝の舜とは全く逆の不孝の舜の姿を載せている。『史記』では、舜が帝位についた後も瞽叟に子道を尽くし、弟の象を諸侯にしたとしており、司馬遷は「不孝の舜」の話を、舜帝には相応しくないものとして採らなかったと考えられる。

（2）㊦の経史系と㊦の孝子譚系の舜説話の関係及び成立時期について

司馬遷は『史記』五帝本紀の最後に、「尚書は欠けているが、その散逸した文章は時々他の書物に見える…私はこれらを併せて検討し、そのうちで最も典雅なものを選んで本紀のはじめとした。」と記している。『史記』の五帝本義では、四獄に後継者として舜を薦められ二人の娘を嫁がせる話が二回見られ、また話が前後する等、明らかに採集したいくつかの話を合わせて載せていると思われる。つまり『史記』は、『尚書』や『孟子』の記述を基とし、民間説話も併せ記載しているが、編纂の時にすでに市場での再会を含む㊦系の伝承が存在していたかどうかは不明であり、司馬遷が「舌で舐めて父が開眼する」という㊦系の奇異譚を取って採らなかったという可能性も否定はできない。

ただ、漢代の画像石に市場のプロットを含む㊦系の画が見られないこと、ま

た本稿の1で述べたように、㊦の孝子譚系の鈔本や、寧夏固原北魏墓漆棺画等において、舜説話が後漢の孝子等と共に描かれていることから、歴山や市場の話を含む「孝子譚」としての㊦系の舜説話が広く流布したのは、㊡の経史系よりも遅いと考えられる。また『史記』では初めから「舜父瞽叟盲」であるのに対し、「孝子譚」系では舜を井戸に埋めた因果で瞽叟は盲目になったと、瞽叟の設定に違いが生じている。この「因果応報」という思想に重きを置くならば、㊦の「孝子譚」系の話は仏教の概念が入ってきてから加筆され、それが仏教の隆盛とともに広がって行ったものと考えられる。

㊦系に分類した『法苑珠林』感應録は、舜を井戸に埋めた後、貧窮した父が夢に鳳凰を見、市場で舜が銭を恵んでくれたと知ると、三日三晩天を仰いで過ちを告白し、その結果市場で舜と再会するという話である。この『法苑珠林』に引く『孝子傳』（佚書）が、劉向の著作を確実に伝えているならば、すでに舜の孝子譚が前漢には存在していたことになり、最も古い㊦系の説話と考えられる。これは他の「孝子傳」とは内容をやや異にし、仏教色のない内容となっており、「孝子傳」の古い伝承をよく残しているものと考えられる。同じ劉向撰の『古列女傳』に市場の話が無いのは、二妃を主人公とするために不要な部分を省いたものと推察される。

『法苑珠林』の後に書かれた㊦系の「孝子傳」の中で、特に「舜子変」は「因果応報」がテーマとなり、「帝釈」による救済という仏教的色彩が強くなっている。「舜子変」の成立時期について、李小栄氏は晋后隋前、(唐)天福年間等、学界では種々の意見があり定まっていないとしている¹⁶⁾。ただ、「舜子変」の原型である舜の孝子譚は、『千字文』に注を施した李暹が北魏の人であること、また北魏の画像石や墳墓の装飾に㊦系の画が多く見られることから、仏教が盛んであった北魏時代に流行していたことは明らかである。「舜子変」の原型となる舜説話は、劉向の「孝子傳」等伝承されてきた舜説話に、伝来した仏教の要素を加え、漢代～六朝末期、遅くとも北魏までには成立していたと推測される。そして「舜子変」自体は、原型の舜説話を語り物として発展させ、仏教の隆盛や俗講の流行と共に広がり、奥書きにあるように書写された天福15年まで

伝わっていたと考えられる。

(3) ㊦の「孝子傳」系舜説話と仏教との関係

「舜子変」には「東院酒席常開、西院書堂常閉。」や「取西南角歴山躬耕」など方角を表す言葉が使われている。これは変文を語る際に具体的なイメージを聴衆に与えるための手段とも考えられるが、その中で特に継母が倉に火をつける場面の「西南角便有火起」と、舜が井戸から脱出する場面の「東家井戸出」に注目すると、なぜ継母が火をつけるのが西南であり、舜が救われるのが東の井戸でなければならなかったのであろうか。『周易』には、西南及び東に関して「舜子変」に結びつく思想は認められず、『旧唐書』等では「西南夷」という使われ方をしているので、異民族の脅威を感じる方角ではあったようだ。これを仏教的観点から見た場合、西南に破壊と滅亡を司る「羅刹天」（「羅刹は悪鬼と云ふなり、人の血肉を食し、或いは空を飛び、或いは地を行く、捷疾なること畏るべきなり。」『一切経音義』）、東に「帝釈天」を配置する仏教の十二天の思想を踏まえていると見ることができる。「大目乾連冥問救母変文」には「帝釈」や地獄の獄卒としての「羅刹」が描かれ、「竜天八部衆」という思想も現れる。また、『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五』には「皆得解脱羅刹之難…或遇惡羅刹… 毒龍諸鬼等 念彼觀音力 時悉不敢害」とあり、禍の一つとして「羅刹」が読み込まれている。また、「帝釈」は、「大目乾連冥問救母変文」以外にも、「降魔変文」「醜女縁起」等に描かれ、スタイン将来の「廬山遠公の話」では、「舜子変」と同様に「帝釈」が変身して主人公を救う。つまり「舜子変」では「羅刹」のいる西南から禍が生じ、「帝釈變作一黃龍、引舜通穴往東家井出。」と、「帝釈」が変身した黄龍に引っ張られて、「帝釈」が守る方角である東の家の井戸から舜が救われるという意図があるのではないだろうか。金岡氏も「当時敦煌地方において帝釈天信仰がかなり普及していたとも見ることができる。」と述べておられ¹⁷⁾、少なくとも多くの舜説話に記載のある「東」に関しては帝釈との関連を考えてよいのではないだろうか。倉の場面で「西南」の記載を持つのは「舜子変」だけであるため、各文献の井戸の場面の「東」に着

文献	舜子変	孟子	史記	古列女傳	論衡	宋書	法苑珠林	千字文注	P. 2621	P. 3536 v	S. 389v	羽39 ノ三	藏ボ 画ス 象ト 石ン	墓寧 漆夏 棺北 画魏
系	B	A	A	A	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B
東	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○

目したのが上の表である。「東家井」、「東井」の記載があるものを○、「井」だけの記載があるものを×として示した。

この表から、Aの経史系とBの孝子譚系では、井戸浚いの場面で「東」の出現に相対関係があることが認められ、A系には「東」は全く現れないが、仏教の影響を受けたと考えられるB系にはほぼすべてに記載があることがわかる。上述の『法苑珠林』の劉向の舜説話がB系の最も古い形だとすると、成立した時点で仏教の影響を受けていないために内容も他の「孝子譚」とはやや異なり、「東の井戸」という表現も持たないのではないだろうか。「舜子変」以外のB系の説話に「西南」が無いのは、「西南」が失われたのか、或いは「舜子変」が「西南」を加えたのかは明らかではないが、ほぼすべてのB系の説話に「東」があることは、A系とB系を大別する一つの指針となり、「東」が仏教的意図を持って書かれたことを示していると考えられる。『千字文』李暹注も、孝経の言葉で結ぶ日本の『陽明本孝子傳』¹⁸⁾も、文中に仏教思想をほとんど有しないにも関わらず、井戸浚いの場面に「東」が現れるのは、この説話が仏教の影響を受けた痕跡を残しているのではないかと考えられる。

終わりに

〔16〕 「舜子変」は、『孟子』や『史記』をはじめ伝承されてきた舜説話の「孝」の思想に、「因果応報」や「帝釈天」による救済という仏教思想を加えた「孝子譚」である。その語りの中では、仏教の「帝釈天」、五行思想の「黄龍」、古代の大地の神である「地神」や「天」が舜を救い、そこには様々な思想の混在を見ることができる。受難の度に自分の部屋に戻り『論語』『孝経』『毛詩』『禮記』

を読む舜の姿は（「歸來書堂院裏、先念論語孝經、後讀毛詩禮記」、聴衆に儒学の大切さをも説いている（ただし舜の時代は孔子よりも古いため、事実としては誤りである）。この「舜子変」における思想の混在について、金岡氏は「先ず変文発生当初には仏教変文が流行し、その発展とともに中国の説話故事を取り入れて行ったものであろうことは間違いない。」と述べておられる¹²⁾。改めて仏教の観点から「舜子変」を読み直すと、「東隣のお婆」は釈迦の「四門出遊」を彷彿とさせ、「自分は群れ遊ぶ鹿にも及ばない。」と舜が嘆く場面は、釈迦の本生譚の「鹿の王」を連想させる。その他随所で仏教との関連を考えさせられ、細部まで仏教思想で装飾されているのではないかと思わされる。「舜子変」が本生譚や仏教経典等から受けた影響について今後更に深く調べると共に、「舜子変」の原形の舜説話が描かれた寧夏固原北魏墓漆棺画や、それに共通する画を持つ莫高窟249窟（北魏）等との関連を探ることで、「舜子変」に内在する思想をより明らかにして行きたいと考えている。

注

- 1) 金岡照光「敦煌本〈舜子變〉再論補正—附斯坦因四六五四本校勘譯註」『東洋大学紀要（文学部）』26 1972
- 2) 伊藤美重子研究代表『敦煌説話文献訳注稿』拙著「舜子至孝変文」2017.3
- 3) 『尚書』卷一 「帝曰我其試哉。女于時觀厥刑于二女、釐降二女于媯汭嬪于虞、帝曰欽哉。」
『山海經』卷十二 海内北經「舜妻登比氏生宵明觸光、處河大澤、二女之靈能照此所方百里。一曰登北氏。」
『楚辭』卷三 「舜閔在家。夫何以嬖。堯不姚告。二女何親。」
『淮南子』卷二十 泰族訓「四嶽舉舜而薦之堯。堯乃妻以二女、以觀其內、任以百官、以觀其外。」
『初學記』卷九 「年二十始以孝聞、堯以二女娥皇女英妻之。」
- 4) 項楚『敦煌變文選注』及び黃徵・張涌泉『敦煌變文校注』では、「男女」について、ともに舜だけを指すとする。

- 5) 金文京「敦煌本〈舜子至孝變文〉と廣西壯族師公戲(舜兒)」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』26 1994
- 6) 陳泳超「“舜子變型”故事在中日兩地的流傳變異」『民俗典籍文学研究』2016.6.30
- 7) 賈慶超『武氏祠漢画石刻考評』山東大学出版社 1993
- 8) 寧夏固原博物館『固原北魏墓漆棺画』寧夏人民出版社 1988
- 9) 川口久雄「敦煌本舜子變文・董永變文と我が国説話文学」『東方學』40輯 1970.9
 - a ポストン美術館蔵の北魏の画像石「舜從東家井中出去時」の刻銘、井戸浚えの画。
 - b ネルソン美術館蔵北斉孝子傳画像石棺「子舜」の銘文、井戸浚えの画。
 - c C.T.Loo本北魏孝子傳石牀「舜子入井時」「舜子謝父母不死」の銘文、図二面。
- 10) 『尚書』大禹謨「帝初于歷山。往于田。日號泣于旻天于父母。」
『韓非子』第十五「歷山之農者侵畔。舜往耕焉、期年剛畝正。河濱之漁者爭坻。舜往漁焉、期年而讓長。東夷之陶者器苦窳、舜往陶焉、期年而器牢。」
『越絶書』卷第三 越絶吳内傳第四「舜有不孝之行。舜親父假母。母常殺舜。舜去耕歷山。三年大熟。身自外養。父母皆餓。」
『搜神記』卷八「虞舜耕於歷山、得玉歷於河際之巖…。」
『初學記』卷九「耕於歷山之陽、耕者讓畔、漁於雷澤、漁者讓淵、陶於河濱、陶者器不窳。」
- 11) 『孟子』万章章句上「堯以天下與舜、…然後之中国、踐天子位焉。」
『史記』五帝本紀「舜年二十以孝聞、年三十堯舉之、年五十攝行天子事、五十八堯崩、年六十一代堯踐帝位。」
『古列女傳』「既嗣位升爲天子、娥皇爲后、女英爲妃、封象于有庠、事瞽瞍猶若焉。」
- 12) 金岡照光「舜子至孝變文の諸問題」『大倉山学院紀要』第2輯 1956.11
- 13) 玄幸子「変文資料再整理—舜子変」関西大学東西学術研究所 2015
- 14) 黒田彰『孝子傳の研究』Ⅱ孝子伝図の研究 p.188 佛教大学通信教育部 思文閣

出版 2001

- 15) 増田欣『『太平記』の比較文学的研究』第二節「本紀」関係の説話一虞舜至孝説話の伝承 角川書店 1976
- 16) 李小栄『敦煌講座書系 敦煌変文』p.293 甘肅教育出版社 2013
- 17) 金岡照光「敦煌の文学文献」『講座敦煌』9 大東出版社 1990
- 18) 西野貞治氏は「陽明本孝子傳の性格並に清家本との関係について」(『人文研究』1956)の中で『陽明本孝子傳』の成立に関し六朝末期迄と推察されている。